

第一章

序論

1.1 問題の背景

社会では、人間は話し相手に傷をつけなく、丁寧にコミュニケーションをすることにより、お互いに人間関係を維持するべきである。その場合、婉曲な表現、道徳の教えが含まれているから、諺はコミュニケーションする役割を果たす。また、諺を使うと、長く話すことがなく、話し手の言いたいことは伝わるのである。

広辞苑によると諺とは (1991: 953):

古くから人に言い習わされた言葉、教訓、風刺などに意を寓した短句や秀句。

諺は慣用句と同じと思う人がいる。双方は、暗示的な意味が含んでいる。ハエル (1994, 74) によると、慣用句とは辞書的意味と文法意味の要素から意味を当てるものではないということである。辞書的にも文法的にも意味を当てられない慣用句と違い、諺の意味はその諺を作る辞書的意味、文法的意味と他の意味との結びがあるため、意味を当てられるというのである。

1) (12)腹を立てる

辞書的には、「腹を立たせる」という意味になるが、「怒る」という気持ちを表す。この慣用句を形成する要素が分かっても、意味は当てられないのである。

2) (49)取らぬ狸の皮算用

辞書的に解釈すると、「捕まえていない狸の皮を計算する」という意味になるが、暗示的には、この諺は「必ずしも受けない物事に計画を立てる」という意味である。狩りされている狸の皮は必ずしも受けないものを表す。狸の皮を何枚受けられるかその皮の売買からいくらお金を設けるかと予想する狩人ははっきりしない物事に計画を立てる人を例えるものである。

日本の社会が持っている地域社会の伝統的知恵 (*local wisdom*) の一つとして、諺は諺が生まれた環境に近い価値観がこもっている。諺は、社会をコントロールし、その社会の規則を破る人を批判する働きがある。諺で人を批判すると、ストレートな言葉より、伝わりやすく、納得できるのである。

国民んの考え方を反映するものとして、現在の日本の地位域の知恵である諺により日本の社会の価値観と考え方を理解できるようになる。アル

ワシラー（2008：127）によると、地域社会の伝統的知恵とは周りの世界にに対する社会の事実の集まり、概念、信念のことである。これは、周り、問題の解決を図り、情報を確証するというものである。つまり、地域社会の伝統的知恵は、知識はどのように生まれ、保ち、実用し、経営し、継続する プロセスである。先祖が子孫に知識を継続する方法の一つは、短い文である諺を伝えることである。今日もう使っていない言葉もあるため、学習者が時に意味を理解できないという場合も少なくない。

諺辞書は、普段は詳しくなく、辞書的意味や暗示的意味しか説明しないため、辞書的意味と暗示的意味の関係は分かりにくくなるのである。最後には、その諺の音と意味を暗記するしかないのである。しかし、ただ暗記するだけで、他の困難に遭うことになる。また、暗記する際、文化が違うため、辞書的意味と暗示的意味の関係が納得できなければ、もっと困難になるのである。

諺を理するため、辞書的意味と暗示的意味の関係である意味間を分析することによる。その分析にはその文化の要素がある。要するに、諺を理解できるように、音と意味を覚えるだけでなく、その諺がどこで生まれたか、社会と文化の背景に関する知識も必要である。社会と文化の背景が異なる日本語の学習者には、諺を深く理解するのに困難である。

諺に関係する研究は認知言語学で分析できる。認知言語学は、特に多義語、言葉の意味は自然にうまれるのではなく、それを動機づけるものがある

ると見なす。多義語の意味間の関係は修辞技法により記述できる。モミヤマ（1997&1998）によると、隠喩、換喩、提喩を使い、多義語の関係を記述できるということである。修辞技法により説明できる基本的意味と意味の拡張を持つ多義語と同じように、その三つの修辞技法を使うことで、諺の暗示的意味を記述することもできる。

先行研究として、諺についての研究はユリアニ（2006）によりされた。その研究は人間の目に関する日本語の諺とインドネシア語の諺に比較するものである。その結果、研究した日本語の諺の二十八は全部インドネシア語の諺と同じ意味を持つということが分かるようになった。その中の五つは人間の目に関係するインドネシア語と同じ意味がある日本語の諺である。が、その研究は文化、辞書的意味と暗示的意味の関係、用例を詳しく説明しない。

その上、ヨハニ（2008）も文化を中心に経験的諺について研究した。双方の研究は認知言語学から見、諺を分析しない。認知言語学による諺に関する研究はまだ少ないため、筆者はこの研究に興味深いのである。

1.2 問題の構成

上記で説明したことに従い、本研究の問題の構成は次のようである。

1.2.1 諺は日本語でどんなものであるか

- 1.2.2 日本の社会における民族語用論上で、文化と諺の関係
はどのように深いか
- 1.2.3 認知言語学上で、隠喩、換喩、提喩はどう区別するか
- 1.2.4 日本人は現在どのように諺を使うか、将来どのように使うか
予測する。

1.3 問題の範囲

本研究は集中するために、認知言語学上、経験的諺で制限することにした。

1.4 研究の目的

本研究の目的は次のようである。

- 1.4.1 日本語で諺を記述する
- 1.4.2 民族語用論上の日本の社会における文化と諺を分析
する
- 1.4.3 認知言語学上、隠喩、換喩、提喩に基づき諺の違いを
分析する
- 1.4.4 日本人は現在の諺の使用を理解して、将来の諺の使用を予測
する。

1.5 研究の意義

本研究の意義は次のようである。

- 1.5.1 認知言語学上の諺により日本の社会の文化と考え方を理解する
- 1.5.2 外国の日本語学習者に日本語の諺を簡単に勉強させる
- 1.5.3 認知言語学を利用し、諺を教えるために教師を手伝う
- 1.5.4 会話の際に日本語の諺を使用する間違いを少なくする

1.6 ■ 研究方法

1.6.1 研究方法

本研究は解決できるよに体系的に集まったデータを分析し、解釈し、説明することにより記述的方法を使用する。

1.6.2 手段とデータ収集

サンプルは『日本の諺』、『こじ諺』のようなまとめた本、日本語の諺の辞書から取り入れる。その他、関係のあるウェブサイト、日本語のビデオ（ドラマ、映画）からもサンプルを収集する。

本研究も手段としてアンケートにより日本人における諺の使用を観察する。調査の結果はその諺が将来筆記でも口語でもまだ使われるかどうかを予測する。

十人の学歴が高い日本人の大学生と教師が回答者である。アンケートは有名な諺と有名ではない諺に関する Arimi (2005)の研究

から十五の諺をランダムで取り入れる。アンケートを使用しても、そのアンケートの結果が質的に分析するのに使うから、本研究は量的ではない。アンケートはEメール、「Facebook」というソーシャルネットワークを通して配布する。

1.6.3 データ分析技法

a. 準備

本、ビデオなどからのデータ収集は諺をリストにするためにデータカードを使用する。そうすることにより、実例のような具体的な例を説明できるのである。それから、教科書から記録し、ビデオを観察し記録するという技法を使用する。筆者自身は研究の手段として扱いする。

b. 実施

データを分析するために、いくつかの段階を辿る。まず収集した諺のデータの辞書的意味を分析する。各諺の意味が分かったら、諺を参照にし、暗示的意味を分析する。それから、隠喩、換喩、提喩を使うことによりその辞書的意味と暗示的意味を認知言語学上で

関連し、研究をする。本研究で使用する技法は言い換え技法である。

そして、その諺は文あるいは会話に実用する。

Arimi (2005) の研究を参考したアンケートは 5 コラムで 15 の諺を入れる表の形で制作して、十人の回答者に分配する。書き込んだアンケートを分析して、その諺が将来まだ使われるかどうかを予測する。

c. 発表

この段階は、本章における問題の構成に対する結論した分析の結果を体系的に発表するのである。それから、今後の課題のために、様々な意見をうける。本研究の結果から日本語学習に諺の理解する貢献を与えられたらいいと思う。

1.7 研究の体系

第一章序論

本章は、問題の背景、問題の構成と問題の範囲、研究の目的、研究の意義、研究の方法、研究の体系からなる。

第二章理論的考察

本章は本研究を支持し、諺に関係する先行研究を述べる。筆者が使用する理論は、諺、その意味、形、機能と関係す

る文化を説明する。その他、筆者は認知言語学、民族言語学に関する理論も述べる。

第三章研究方法

本章には、研究方法、手段、研究のデータ収集、準備、実施、発表からなるデータ分析技法は書く。

第四章データ分析とその説明

本章は、認知言語学に基づき、隠喩、換喩、提喩を使う諺を分析する結果である。

第五章結論と今後の課題

本章は問題の構成の答えとして、発見したもの、分析結果と今後の課題を述べる。